

「安全・安心な学校生活を目指した取組」
～子どもたちの命をつなぐ危機対応訓練研修の充実～

姫路市立高浜小学校
主幹教諭 三村 理加

1 取組の内容・方法

姫路市では、食物アレルギーを有する児童生徒が、安全・安心な学校生活を送ることができるように、平成22年度に策定（平成29年3月改訂）された「姫路市食物アレルギー対応マニュアル」（資料1）を基に、各学校で学校給食を含む学校生活における個別指導や学級指導などの日常対応を行っている。緊急時対応についても体制整備を求められている。

平成25年2月には、新たに「学校災害対応マニュアル作成指針」（資料2）が示され、本市の「災害対応マニュアル」と「危機対応マニュアル」が一本化され、自然災害、人的災害や犯罪など事件、事故も含めた様々な学校災害に対して一元的な対応を行うこととなった。現在、教職員研修に活用している危機管理に関する内容を指針より一部抜粋し、まとめた。



■指針のねらい

- ・危機に対して、平素から未然防止に向けて取り組むこと
- ・発生時には被害を最小限に抑えること
- ・一刻も早く日常の教育活動に戻すこと

■姫路市の学校園が守るべき優先順位

- ①子どもたちと教職員の安全を確保する
(命を守る、保護者へ引き渡す)
- ②避難所として地域住民等を引き受ける
- ③授業を再開する



■緊急時の組織体制(資料3)

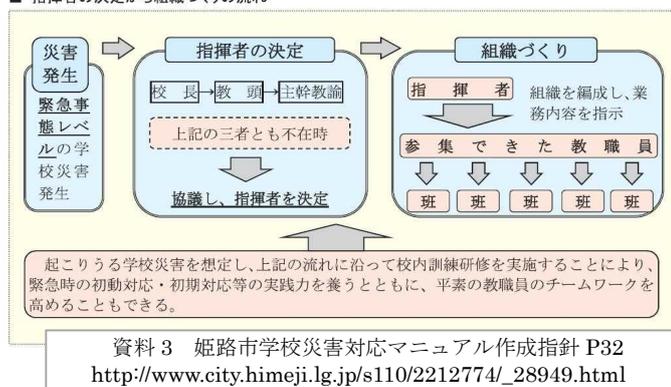
指揮者が近くにいない場合は、その現場にいる者で組織づくりをし、初動対応を行う。「緊急時に直面した場合、普段実践していることしかできない。普段実践していないことは決してできない。」

という考えに基づき、災害対応を日常的な学校園教育活動に組み込むことが重要であると示されている。

■迅速で確実な初動対応・初期対応(資料4)

学校園が守るべき優先順位を全教職員が理解していれば、現場にいた者が迷わずに子どもと教職員の命を守る行動をとることができる。

■指揮者の決定から組織づくりの流れ



資料3 姫路市学校災害対応マニュアル作成指針 P32
http://www.city.himeji.lg.jp/s110/2212774/_28949.html

■より実効性のある教職員研修の実施

資料4 姫路市学校災害対応マニュアル作成指針 P34

本校は児童数 1000 人超の大規模校で、教職員数も 50 人を超える。食物アレルギー対応を必要とする児童は平成 30 年 3 月現在で 70 人、アレルギー原因食物は約 20 食品に及び、エピペン処方者は 4 人いる。あわせて、それ以外の危機対応事案も決して少なくはない。

危機対応の取組の初期(平成 23 年)の頃は、あらかじめ役割が定められていたシナリオ通りのシミュレーションだったため、スムーズに進む一方で、設定役割以外の教職員の初動・初期対応の体験値が上がらないという課題が出て、シナリオなしのシミュレーションを実施したが、臨機応変に動くことが出来ず、現場は混乱した。

そこで、全教職員の危機対応力の向上を図れるよう実効性のある訓練研修を目指して、この指針を基に学校災害対応マニュアルを作成し、「学校園が備えることや教職員が学ぶこと」を中心に取組を進めた。PDCA サイクルの視点で食物アレルギー緊急対応、学校水泳事故緊急対応、多数傷病者対応等の実際を想定した教職員研修を実施し、検証・改善を行っている。また、平成 25 年度よりその取組を基にパッケージ化した演習プログラムを学校外の研修において紹介する機会をいただいている。その本校と学校外の取組内容について次の 2 点から報告する。



(1) より実効性のある危機対応訓練研修

危機対応の教職員研修は、児童が安全・安心な学校生活を送ることができるよう、校長のリーダーシップのもと、全教職員が日常対応や事故防止及び緊急時における支援体制ができるように行うものとして実施している。マニュアルは作成しただけでは、実効性があるかどうかはわからない。緊急時は、迅速かつ確実にしなければならないことが同時に重なり発生するので、教職員には臨機応変な対応が求められる。

<臨機応変に動ける現場づくり>

- ・教職員一人一人が、同時にしなければならない幾つものことを知っている。
- ・同時にしなければならない対応のどれでもができる。
- ・対応状況の情報共有が簡単にできる。
- ・普段からチームワーク力がある。
- ・日常生活においても教職員の危機意識が高い。

<関係機関(消防署・救急救命士)との実践的な連携>

- ・実際に、119 番通報(訓練通報)や現場での救急救命士による特定行為を含めたシミュレーションを繰り返すことで、緊急対応の流れの見通しが持てるようになる。
- ・初動及び初期対応へのアドバイスをいただけることで、対応スキルが向上する。
- ・実際の状況のような緊迫感のあるシミュレーション体験ができる。



□演習 A 『子どもの命をつなぐ危機対応シミュレーション(実地演習)』 設定：約 30~40 分

- ねらい 学校の危機事態における対応シミュレーション(演習)を通して、危機発生時に必要な初動・初期対応(救急処置を含む)や体制を全教職員で共有し、危機対応体制を整えるための修正可能な改善点を明らかにする。
- 方法 想定された危機事案に対して、実際に学校内の教室や職員室等で、教職員のチーム力を発揮しながら迅速に臨機応変に対応していく。演習後には、全教職員で振り返りを行う。

＜危機対応シミュレーション(実地演習)の要点＞

事前	<ul style="list-style-type: none"> ●教職員間でチームワークや臨機応変な対応力を遠慮せず発揮できる雰囲気づくり。 ●シミュレーションのねらいや重点ポイントを毎回、具体的に決めておく。 <ul style="list-style-type: none"> ・例) 声を出し合う、胸骨圧迫、人工呼吸は交代しながら行う 時刻を刻む、自分の役割を見つけ行動する、情報を確実に共有する等 ●全教職員で訓練全体の様子や成果・課題を共有できるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・例) ビデオカメラ等でシミュレーションを記録する等 ●企画、運営は視点の偏りを防ぐために一人で担わず組織的に行う。 ●環境準備は入念に、演習本番は臨機応変な対応を目指す。 <ul style="list-style-type: none"> ・演習に使用する物品(AED トレーナー等)の準備は確実に行う等
実践	<ul style="list-style-type: none"> ●被害想定をするなかで、自分自身の危機に対する力を知る。 <ul style="list-style-type: none"> ・想定力、技能も含めて対応力、パニック時の自己判断力等 ●現在の立場や役割に関係なく、教職員全員で想定される初動、初期、中期対応について必要な事柄を共通理解する。 <ul style="list-style-type: none"> ・一次救命の方法(*1)、同時進行で必要とされる対応(*2)を具体的に出し合う。 <ul style="list-style-type: none"> (*1) 意識の確認、止血、胸骨圧迫、人工呼吸、AED、ショック体位、エビペン等 (*2) 記録、インターフォン、トランシーバー、緊急放送、担架、救急セット 毛布、119 番通報、110 番通報、保護者連絡、児童生徒誘導と確認、救急車誘導等 ●緊急時にだれもが迷わず、どの役割でも迅速に行動できるようにトレーニングをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・例) 個々の練習とショートシミュレーションを組み合わせる工夫 立ち位置を交代して(視点を変えて)シミュレーションを体験する等
事後	<ul style="list-style-type: none"> ●各個人、グループ、学校全体、関係機関等での振り返り、評価(成果、課題を整理)を反映させて、自校の危機対応体制を整えていく。 <ul style="list-style-type: none"> ・例) 振り返りシート等の活用、発展性を持った訓練研修内容の検討 実際に自校で発生した事故事案の対応検証等

写真 4



H30 年度 高浜小校内研修「食物アレルギー危機対応訓練」の流れ

事例 1 年 0 組児童 A(担任)、4 年 0 組児童 B(担任)

【仮注釋】 食物アレルギーあり、アナフィラキシーショックの既往あり
【食物アレルギーの日常対応】 アレルゲンは除去中で、代替食持参。
エビペンを所持。飲み薬とともに校長室で預かっている。

1 年、4 年担任：[各教室]
校長・教頭・専科(給食時間中は職員室)：[職員室]
応援者：[各教室]
他の教職員：[1 年、4 年、__ 組、4 年 __ 組]
⇒全校放送で訓練をスタートします。

準備・課題事項
・訓練に必要な生活防具(防護服、保護靴)、
本年度の学年総練習を改めておく。
(校内事務対応などの緊急時の応援者と割り)
・サイレン・職員室
・放送用職員室
・インターフォン(教頭の下)
・インターフォンによるメッセージ放送も有
・総集約に必要事項記入済み

【経過】
給食時間、教室で、他の児童と一緒に児童 A(B)が給食を食べていたところ、何らかの原因で児童 A(B)がアレルゲンを摂取してしまいました。(職員に気付いていない)
担任は、本人からの訴えで口元の腫れが少しずつ赤く腫れて、じんましんが出てきたことを確認する。時間の経過とともに気分不良と嘔吐も出てきた。だんだん本人の不安も強くなってきている。

役割	教室(担任)	近くの教室(学年年教頭)	保健室(養護教諭)	職員室(校長・教頭・専科・応援者)														
対 応	<p>「児童 A の目・口が腫れ、 顔にじんましんが出てきている。」</p> <p>時刻を記録！</p> <ul style="list-style-type: none"> アレルギーの付着を洗い拭す。 近くの教頭に応援を求め、 時刻の確認をしながら、そばに付き添い声をかけながら、様子を観察する。 動かせず、楽な姿勢で休ませる(活版印刷) <p>①子どもを動かさない！</p> <p>の薬となるものを取りのぞく</p> <p>*動かされると、アレルギー症状が悪化する危険性がある。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 職員室に連絡する。 他の児童を落ち着かせる、移動させる。 教員室へ引き越すまでの経過を詳細に把握する。(情報収集と記録) <p>一情報の共有のために連絡。インターカムで職員室へ状況を伝える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 現場に急行する。 状況に応じた救急処置を行う。 状況により、現場の救急体制を整えていく。 今後の状況を予測し、必要な準備をする。 	<p>情報収集と状況把握、放送・授業は後援</p> <ul style="list-style-type: none"> 連絡を受けた職員は、管理棟、養護教諭に連絡 応援者に連絡 <p>「アレルゲンが入った可能性があります。今すぐ 110 へ来てください。詳しい様子がなければ連絡しますので、携帯電話をそばに持っておいてください。」</p> <p>担任の状況を伝え、来校の依頼。 専科(防犯、エビペン)の使用について確認する。 現場から携帯電話で保健室へ状況を伝え、内線室のエビペン使用の確認をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> AED と児童のエビペンとのみ、原則別室、インターカムを持って、現場に急行する。 救急車要請 携帯電話から通報して、電話をつないだまま現場へ行き、状況を伝える。 <p>エビペン所持の児童に症状が出た場合、アナフィラキシーショックを疑い、即時対応が要する。 * 救急車を要請する場合は、必ず下記のことを伝える。 『食物アレルギーでエビペンを持っている高浜小 0 年生の〇〇さんです。』</p> <p>全校放送 サイレンを鳴らし、応援要請する。 『緊急放送！() 年() 組です。応援の先生は、職員室に集合してください。(その他のクラスは、指示があるまで、教室待機をお願いします。』</p> <ul style="list-style-type: none"> 応援者は職員室に集合後、指揮者の指示で緊急対応に協同につく。 														
	ポイント	<p>アレルギー症状は急劇に進行するものとして現場では迅速での対応をとり、救急隊へつなげる</p> <p>●意識の確認 ●気道確保 ●胸骨圧迫 ●人工呼吸 ●ショック体位 ●AED</p> <p>●保護者と連絡 ●内服薬 ●エビペン</p> <p>*人工呼吸をするとき一行うちはアレルゲン進入軽減のためにつがい息をする又はシートマスクを使う</p>	<ul style="list-style-type: none"> 救急隊へ情報を確実に引き継ぐ。 氏名・年齢、性別 原因や様子 救急箱内内容など 	<p>声を出して、状況や処置、時刻や指示を伝え合い、対応状況が共有できるようにする。 その現場の状況に応じて必要な役割を見つけ臨機応変に対応しながら救急隊へつなげる。</p> <p>●救急隊 ●管理棟の教頭 ●管理棟の応援(インターカム) ●放送 ●防犯監視 ●管理棟の応援 ●救急車 ●救急隊員(インターカム) ●緊急放送 ●及び</p>	<table border="1"> <tr> <th>学年</th> <th>応援(2名)</th> </tr> <tr> <td>1 年</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2 年</td> <td></td> </tr> <tr> <td>3 年</td> <td></td> </tr> <tr> <td>4 年</td> <td></td> </tr> <tr> <td>5 年</td> <td></td> </tr> <tr> <td>6 年</td> <td></td> </tr> </table>	学年	応援(2名)	1 年		2 年		3 年		4 年		5 年		6 年
学年	応援(2名)																	
1 年																		
2 年																		
3 年																		
4 年																		
5 年																		
6 年																		

(2) パッケージ化した演習 B プログラム

□演習日 『子どもの命をつなぐ危機対応訓練（机上演習）』 設定：約 60～80 分

○ねらい 学校の危機発生時に必要な初動・初期対応（教員処置を含む）や体制ついて、机上演習を通して全教職員で共有し、自校の危機対応における課題に気づく。

○時間設定
1 クール目：説明 5 分、机上演習 15～20 分、振り返り（課題点、改善点）5 分
2 クール目：担当場所（事業発生時における場所）を交代して、机上演習 15～20 分、振り返り（課題点、改善点）10 分

○準備物（1 校に）
◆例 横造紙 1/2 大、付箋 7.5×7.5cm の 1/2 カット大（3～4 色で各 20 枚程度）
黒色水性マーカー 人数分

○取形
◆例 グループ（1 グループ 10 人程度）に分かれて、横造紙、付箋を使用

	教室	近くの教室	職員室	その他、保健室
a				
b				
c				
d				
e				

＜演習事例＞あらかじめ、発生時刻、場所は設定しておく

	心肺停止対応	食物アレルギー対応	地震（津波）避難対応（ライフライン停止状況）
a	窓のそばで倒れこむ	「かゆくなってきた」と訴えてきた	携帯電話等から緊急地震速報音が鳴る
b	棚の角で顔を切り、出血（顔色悪い）	咳も出てきて、気分も悪そう	立ってられない揺れが 3 分くらい起こる
c	呼びかけに反応しなくなってきた（呼吸していない）	呼びかけに反応しなくなる	割れたガラスで教員出血している
d	救急車到着	自発呼吸なし	不安感が強くなってきている
e	救急車搬送先決定	救急車搬送先決定	次の揺れが起きる

○手順

- 机上訓練のねらいと重点ポイントを明確
例）危機発生時の対応力向上、体制見直し
危機発生時の校内状況を想定する機会
・重点ポイントは、1 クールごとに設定
例）「声を出しおろす」「職務担当は複数で交代」「情報共有の方法は〇〇」「情報収集、記録の方法は□□」等
- 参加者の担当場所（事業発生時における場所）を決定
・1 場所に 2～5 人
・場所別に異なる色の短冊（付箋）を配布
・グループ全体の動きを観察する役＝振り返りの際はグループのリーダーとして意見をまとめ役（1 人設定）
- 事業内容は、演習のなかで 2～5 分経過することに提示（a→b→c→d→e）（あらかじめ事業の全内容は示さない）
- 対応内容はできるだけ、具体的に記入
例）職員室へ連絡 → 職員室へインターフォンで「〇〇さんが△△です。」
AED → ①AED を持って行く、②AED のパッドを装着してスイッチを押す等
- 短冊（付箋）は、対応する場所（枠）に貼付
例）職員室から廊下で教室へ駆けつけて対応 → 教室の枠に「〇〇を△△する」と書いた短冊（付箋）を貼る
- 演習を振り返り、意見交流
・設定していた重点ポイントについて課題や修正可能な内容を含む
例）同時進行に必要な初動対応が多い（第一発見者だけでは対応が難しい）⇒現在の立派や定められた役割に関係なく現場で優先される対応は⇒情報共有の方法は⇒情報収集、記録について⇒
- 2 クール目の演習
・⑤を生かして、改めて重点ポイントを設定
・グループ内で担当場所を交代
- 振り返り、意見交流
・危機対応の課題（各学校の課題等）について
・危機対応研修についての気づき、感想

このプログラムは、各学校において、だれでも簡単に危機対応訓練研修を継続的に取り組めるよう考案した。学校の多様な事案にも対応が可能である。

危機対応訓練「机上演習」

◆趣旨◆
学校の危機発生時に必要な初動・初期対応や体制を机上演習を通して、全教職員で共有し、自校の危機対応における課題に気づく。

資料 6a

危機対応訓練「机上演習」 危機対応の役割は決まらず、その場で優先順位を考えたが役割を見つけ、対応していきます

資料 6b

危機対応訓練「机上演習」 第 5 校時開始直後

資料 6c

窓のそばで倒れこむ
棚の角で顔を切る
ぼつとしていて視線が定まらない
呼びかけに反応しなくなる
呼吸していない
救急車到着
救急車搬送先決定

資料 6 H28.29 年度 健康教育指導者養成研修(教職員支援機構主催)の講師担当時にも使用

2 取組の成果

(1) シミュレーション研修は、教職員自身の危機対応スキル面の課題（ページング放送の順がわからない。初動対応の優先順位がわかりにくいなど）が明確になりやすい。異なる場所での対応内容についても、事前の DVD（以前のシミュレーション記録動画）視聴で、シミュレーションのイメージがしやすくなった。さらに、軽度な事故対応発生時にも教職員のチームワーク力を発揮し、応急処置と情報共有がスムーズに同時進行できる。危機対応を通して教職員間のつながりがより強まったといえる。

(2) 演習 B プログラムは、体験した教職員の感想に「危機対応を我ごと意識で考えることができた。校内研修企画見直しの参考にしたい。」とあった。研修を通して、危機意識の変容の機会としての役割は果たせたといえる。

3 課題及び今後の取組の方向

学校を取り巻く環境は、日々、様々なリスクに囲まれている状況である。そのなかで教育活動に携わる教職員は、子どもたちの安全・安心な学校づくりに努めることが求められている。

毎年 2 回の研修で、危機対応力が著しく向上することは難しいといえる。しかし、今後も PDCA サイクルの視点で研修の在り方にも改善や工夫を加え、校内組織と消防署の連携を含めた内容の充実を目指したい。もしもの時に、教職員のチームワーク力で迅速、確実な対応でかけがえのない子どもたちの命をつないでいきたいと強く願っている。